

ホーチミン日本人学校の英語コミュニケーションに関する課題 —現地校との交流を通して—

前在ホーチミン日本国総領事館付属日本商工会議所立ホーチミン日本人学校教諭
三重県四日市市立西笹川中学校教諭 板東 伊吹

キーワード：ホーチミン、英語教育、レクイドン中学校、交流

1. ホーチミンの教育事情

ベトナムの人口は約 9620 万人（2019 年）であり、世界の中でも人口が多い国である。首都はハノイであるが、ホーチミンは経済的にも発展し、人口約 899 万人（2019 年）とベトナム最大の都市である。近年、海外企業の進出も著しく、急速な経済発展をとげ、非常に活気が見られる。

1975 年にベトナム戦争が終結し、翌年ベトナム社会主義共和国が誕生した。政治はベトナム共産党による一党独裁制で行われている。そのため、国の影響力は強い。学校も国がつくった国立学校が多く、その他、個人・企業による私立学校、外国資本等によるインターナショナルスクールもある。

教育は教育訓練省が管轄しているが、「教育法」が 1998 年に制定されるなど、法整備は比較的新しい。しかし、2011 年から英語教育が小学校から必修教科となったこともあり、親の英語に関する教育熱は高い。市内には英会話学校が多くあり、開始や終了時刻前になると、子どもの送迎のためにバイクや車が道路にあふれ、大きく渋滞するのも日常の光景である。費用に関してだが、有名な英会話学校である ila だと、16 週間 1 ターム（1 回 2 時間で週 2 回）で約 1800 万ドン（約 9 万円）とベトナムの物価と比較すると決して安くはない価格である。それにもかかわらず、多くの子ども達が英会話学校に通っている。

これは英語の能力が将来の収入が大きく関係していることが背景にある。総合人材サービスマンパワーグループ（Man Power Group）が発表した「2019 年総労働力指数（total Work force Index 2019）」によると、ベトナム労働者の平均月収は約 242USD となっている。もちろん都市部と地方部での差は大きいですが、先進国の平均月収と比べてもかなり低いことは明らかである。アメリカの国際決済サービス会社ユニテラーの報告では、海外で働くベトナム人労働者 1 人当たりの本国への送金額は月 735USD という。また、アメリカの人材コンサルティング大手マーサー（Mercer）と地場タレントネット（Talentnet）による 2019 年度の調査では、外資系企業と地場系企業の給与格差は大きく、管理職で 33%、専門職 25%、一般従業員 14%となっている。また、外国大学卒の給与は国内大学卒の給与を 34%上回っている。このことから、外国や外資系企業で働く方が、収入が多いということは容易に理解できる。だからこそ、私が見学したホーチミンの学校（レクイドン中学校や LITTLE STARS INTERNATIONAL SCHOOL）の先生が話したように、子ども達の夢の多くは英語圏での起業家（社長）、海外で活躍するビジネスマンになることであり、英語教育が熱心に行われているのである。

ちなみに、ベトナム全体の英語のレベルであるが、スイスに本部を置くグローバル教育機関、EF Education First が発表した「EF 英語能力指数 2019」では、非英語圏の世界 100 カ国・地域中、ベトナムは第 52 位（アジア 25 カ国・地域では第 10 位）であった。日本は第 53 位である。私自身がホーチミンで生活していても、多くの店では十分英語で対応ができており、話せる人は自信を持って話している人が多いことを肌で感じた。

そういった英語に力を入れているホーチミンで、私が勤務したホーチミン日本人学校と現地の学校（レクイドン中学校）とで交流する機会を 2 度もつことができた。この報告では、その実践内容とそこから見てきた日本人学校の課題等について述べたい。

2. 日本人学校と Le Quy Don junior high school (レクイドン中学校) との交流

ホーチミン日本人学校はホーチミン市内でも、都市部から離れた南部の7区に位置する学校である。児童生徒数は激増しており、平成9年度の創立当時は15名であったにもかかわらず、平成28年度には445名、令和元年度には625名（小学部の児童509名、中学部の生徒116名）で4月を迎えた。現在、学校の目の前にもレジデンスマンションが建設中であり、今後も入学、編入学する児童生徒数は増え続ける模様である。こういった状況の中で、平成28年度には新校舎が増築されたのだが、現在空き教室もなく、数年後にはさらに新校舎が建設される予定である。

一方、レクイドン中学校は国立学校で都市部の1区にあり、生徒数が3000人とホーチミンで1番大きな中学校である。また学校の歴史は古く、創立140年をこえ、フランスの植民地となっていた時代にフランス人の子ども達のために建てられた学校である。その後、通訳等養成のためベトナム人にも開放し、現在はベトナム人のみが通う学校となった。そのような歴史的背景もあり、レクイドン中学校では外国語に特化し、フランス語や日本語、ドイツ語を学べる特色がある。



レクイドン中学校

(1) 中学部3年生との交流

日本人学校中学部3年生とレクイドン中学校9年生はレクイドン中学校で交流を行った。内容としてはそれぞれの学校紹介、レクイドン中学校の授業参観、両校混ざってグループを作ったゲーム、学校対抗の綱引き、学校見学を行った。

授業参観は英語の授業であったが、7年生のグループで、現在完了形についての学習であったため、日本人学校の生徒も交じって授業を受けたが、レクイドン中学校の生徒と同様に授業を受けられていた。ゲームはそれぞれの学校が協力し合って、新聞紙を使って高く積み上げ、高さを競うものであった。はじめはどちらの学校の生徒もそれぞれが勝手にやっていたが、しばらくすると、英語やジェスチャーを使い、やりたい方法を共有して、協力して進んでいた。ただ、自分の意見に自信がないのか、やり方をうまく伝えられないのか、思いを伝えられない生徒は日本人学校やレクイドン中学校、両校にいた。ただ、一緒にミッションをクリアできたのが嬉しかったのだろう。このグループ活動を通して、2つの学校の生徒同士の距離が縮まり、この後の休憩時間や学校見学の際にも自分達でコミュニケーションをとって仲良くなり、一緒に行動している生徒も見受けられた。

全体的に見て、レクイドン中学校の生徒が積極的に日本人学校の生徒とコミュニケーションをとろうとリードしてくれていた感があった。日本人学校の生徒の感想にも

「『外国人とコミュニケーションをとる』という面ではやはり日本人はまだまだ力不足なのかなと思った。レクイドン中学校の人がすごく積極的に話しかけてくれたのですごく助かった。自分も今後は積極的に話していき、少しでも多くの人とコミュニケーションをとりたい。今のうちに話すことが将来的にもものすごく大きな力になると思った」

とあった。日本人学校の生徒がレクイドン中学校の生徒に比べ、積極的にコミュニケーションをとるといったことを含めての語学力の不十分さを痛感している生徒は多かった。日本人学校の中学部3年生は実用英語技能検定2級以上の合格者が多く、ある程度英語を使う能力があるにもかかわらず、このような差を感じてしまっていた。

(2) 中学部2年生との交流

日本人学校中学部2年生とレクイドン中学校8年生は日本人学校で交流を行った。内容としては日本人学校の英会話の授業参加、学校見学、お互いの学校紹介、日本文化の紹介を行った。

英会話の授業参加は、普段日本人学校で行われている4グループに、レクイドン中学校の生徒が分かれ、一緒に

授業を受けた。授業に関してしてみると、日本人学校、レクイドン中学校共に同レベルのように見えた。もちろん、レクイドン中学校の生徒が遠慮をしていた生徒もいたかもしれないが、挙手して答えていたり、前に出て答えたりする場面も見られた。ただ、英語を苦手として、質問に答えられないレクイドン中学校の生徒もいた。

日本文化の紹介は日本にある昔ながらの遊びをテーマとして、折り紙やけん玉、コマ、羽根つきなどを一緒になって体験した。折り紙は鶴や手裏剣を作るといったものであった。人気なのは羽根つきであった。ベトナムではバドミントンが人気スポーツの1つであるため、ラケットで打つということには抵抗感がなかったようである。ただ、レクイドン中学校の生徒同士でやっていたため、日本人学校の生徒にペアでやるように指示した。男女関係なくやれたのだが、話すことはなく、黙々とやっている生徒が多かったように見えた。

今回の交流会を全体的にみて、日本人学校、レクイドン中学校の生徒共に活発に話すという場面はそう多くはなかった。もちろん、個人的に仲良くなった生徒はおり、個人情報の交流をしていたことはあったが、そんなに多くはなかった。英語で話すということもあったが、そんなに盛んに話されているわけではなかった。レクイドン中学校の生徒にとっては日本人学校を訪れるとい



レクイドン中学校との交流の様子

うことで、緊張していたこともあったのかもしれないが、何度か私が訪れた際の子供達の様子を見ている限りではもっと活発に動いていたように思えた。発達段階や今回交流した生徒達は消極的な生徒が多かったのかもしれない。ただ、日本人学校の生徒同様、英語を理解する能力は確かに高いのであるが、学校の授業や英会話学校以外、違った場面で話す機会が少なく、英語で見ず知らずの人と話すことに抵抗を持っている生徒が多いのかもしれない。

3. まとめ

ホーチミン日本人学校の児童生徒は、小学部で週3回、中学部で週2回英会話の授業があり、英語を母国語とする先生から英会話を学んでいる。また、各家庭においては英語教育に熱心で、英会話スクールや英会話の家庭教師等を雇っているところは多く、実用英語技能検定に関しても中学部3年生で2級を所持しているのがクラス生徒の半分以上を占めている。そのため、日本人学校の子供達は英語に関する力は十分身につけていると言える。しかし、ホーチミンの場合、外国の地にいながら、なかなか外部での活動を積極的に行う子供達は多くはなく、学習塾だけでなく、スポーツや音楽などの習い事も日本語で行うなど、日本人コミュニティの中にいる。また、家族との外食も日本食が主であるし、親が注文等やりとりすることが多い。そのため、進んで英語を使うという機会は多くなく、せっかく学んだ英語を発信する機会が少ないように思える。レクイドン中学校と交流をした中学部2年生の感想にも

「私は今回の交流会を通して、『積極性』の重要性を実感しました。私は、英語はさすがに『What's your name?』くらいは言えるはずだったし、ベトナム語も一応話せるから、交流しやすかったと思います。しかし、私はあまり話すことができませんでした。それは自分に積極性と話しかける勇気があまりなかったからだと思います」

とある。前述した中学部3年生でも同じ感想があったように、積極性を持って、自ら話しかけるというのは日本人学校中学部の大きな課題である。

そのような状況も鑑み、日本人学校としても国際交流を行う機会を取り入れてきた。前述したレクイドン中学校との交流会や中学部1年生ではFFSC（ストリートチルドレン友の会）との交流などを行っている。FFSCとの交流では英語ではなく、ベトナム語での交流だが、言葉が伝わらない相手にどのように遊びを教えるのか勉強になっている。また、中学部2年生で行う職場体験学習でも、例年日系の企業等を体験先として取り組んでいる。担当者は日本人だが、実際に子供達の様子を見てくださる方には日本語が話せず、英語で会話する方も増えてきた。この

ような体験も子ども達にとっては良い経験となっている。ただ、日本と同じ教育課程を行うため、なかなか教科以外の活動時間を取り入れることは難しい。しかし、今後国際社会に生きる人になっていくため、日本人学校でも英語を使う機会を増やすなど、発信する機会を増やしていく必要があると感じた。

日本人学校ではなく、日本の公立中学校を見た場合、海外に比べると、英語を使ってコミュニケーションをとる機会は極めて少ない。その機会の確保に努めることも大切であるが、コミュニケーションをとる元となる、人に思いを発信しようと思う意欲やスキルを学ぶことも重要である。自分の意見や思い等を発信することに自信が持てない生徒は日本に多い。今後、生徒達のコミュニケーション能力を高め、自分が知っている相手だけでなく、世界中に発信ができるような生徒の育成を行っていきたい。